

"In his singular character the dual nature alternately asserted itself."
Conan Doyle

「彼の性格は特異で、二つの性質がかわるがわる表面に現れる」 コナン・ドイル

おなじみ Sir Arthur Conan Doyle(1859-1930)の短編集 "The Adventures of Sherlock Holmes"(『シャーロック・ホームズの冒険』)の中から、"The Red-Headed League"(『赤毛組合』)を取り上げました。表題の言葉は主人公のホームズが、音楽会でうっとりヴァイオリンの演奏に聞き入っている姿を描いています。この作品では特にホームズの内面にふれる描写が興味深いので、あらすじに続いてそのあたりを中心にをご紹介します。



はやらない質屋の主人ウィルソンは赤毛である。ひと月ほど前にやとった店員のスポールディングが持ってきた赤毛組合なるものの募集広告に、毎日10時から2時まで勤めれば高給が得られるとあるのを見て応募したところ、大勢の中から選ばれて採用された。決して休まないという条件でオフィスで百科事典を筆写するという楽な仕事だったが、8週目に突然組合の解散を通知されたという。ホームズが調べてみると、スポールディングは実はおたずね者の凶悪犯で、質屋の地下室から裏の銀行の地下室に通じるトンネルを掘って銀行の地下室に保管されている金貨を盗む計画を立て、主人を一定時間外出させるために赤毛組合なるものを作ったのだ

この短編集の作品は、いずれも相棒のワトソンが語り手となって進められていきますが、ごく常識的でおっとりした医者ワトソンは、鋭いひらめきを持つホームズの引き立て役にもなっています。一緒に依頼人の話を聞き実地検分をしても、ホームズは直ちに推理を働かせて先を読むのに対して、ワトソンはいつもまったく霧の中。ホームズによれば、それは「見てはいても、観察しないから (You see, but you do not observe.)」で、見るのと観察するのではまるでちがうそうです。

さて、『赤毛組合』の話にもどります。質屋のウィルソンが、突然解雇されたことへの不満を述べて帰ったあと、ホームズはしばらく瞑想して(ワトソンは彼が眠ったものと思ってうとうとして)から、ワトソンと現場検証に行き、そのままサラサーテの演奏会に誘います。彼は自らヴァイオリンを演奏し作曲する熱烈な音楽愛好家です。一階正面の特等席にすわったホームズは、おだやかな夢見のようなまなざしで音楽に合わせてほっそりした長い指を振りながら至福の時を楽しんでいました。それは鋭い推理で非情なまでに犯人を追いつめる探偵のホームズとは似ても似つかない姿でした。そこでワトソンの口から、表題の "dual nature(二つの性質あるいは性格の二重性)" という言葉が出たのです。探偵ホームズの極端なまでの正確さや機敏さは、今のような詩的で瞑想的な気分から反動的に生まれるのであろう、こうした気分の揺れがあるから、彼は極度のリラックス状態でもすぐに猛烈なエネルギーを集注できるので、ワトソンは分析します。実はこうしてゆったりとしているときほど探求心が湧き起って理解力がとぎすまされ、直感が働くようになるので、知らない人にはまるで超人的な知能の持ち主のように見えるのです。この日も音楽にひたりきっているホームズの様子から、事件の解決は近いことが感じ取れました。

19世紀後半には心理学でいう「無意識」の概念が現れ、心の中には意識できる部分と意識されない部分がある、すなわち、自分の中にはまた別の違う自分が住んでいるという「多重人格」の考えが関心を集めるようになりました。この考えに興味を引かれて作品に取り入れた作家にスティーヴンソン、エドガ・アラン・ポーなどがあり、本来医者だったコナン・ドイルも当然関心を持って、この二人からも大きな影響を受けたことが知られています。

この短編集に収められた12編の作品は、1891年『ストランド・マガジン』誌の7月号から毎月掲載されたもので、人気は爆発的に高まって翌年『シャーロック・ホームズの冒険』として単行本で売り出されるようになり、ドイルは作家としての地位を確立しました。